



理事長様々 ~Spin off~



Create & Edit by Information Committee
Text & Interviewer by Dai Kawakami
Photographed by Takayuki Imoto

Special Talk

むつJC 第55代理事長
齋藤 晃史



むつJC 第60代理事長
道川 貞徳

来れるときでいいよって言葉は深くて 来れるように自分で時間を作ること

⇒SADANORI MICHIKAWA



齋藤晃史（以下、齋藤先輩）

まず、最初のきっかけは、本業の社労士の仕事で照月苑の阿部先輩（OB阿部貴裕先輩）のところに行ったのがきっかけです。その時は普通に仕事の話をして終わったのですが、それから数日もしないうちに中央町のサンデーの駐車場でばったり会って、「齋藤君、君に合うピッタリの会があるよ。青年会議所っていうんだけど今度、定例会があるからオブザーブしてみない？」と。

その時まだ32歳で開業したてで、お客さんも特にいないし、ちよつと営業も兼ねるような下心もありつつ、今後どうしようか悩んでる状況で誘いの言葉をもらい、そう言ってもらえるなら行ってみよう、と。

本当はそういう「会」とか好きではなく、基本的には一人で仕事をしていたいし、誰にも会いたくないし、休みはずっと家で本を読んで映画観てゲームをして、みたいなのが好きなんですけど、このままではいけないし（自分も仕事も）知ってもらわないとダメだな、というところもあって、とりあえず定例会に（出ようと）。

その時は三国先輩（第48代理事長三国渉先輩）が理事長の時だから2007年にオブザーブさせてもらって、その時の定例会が八戸プラザホテルの方がむつブランドホテルに来て

「JICとは何ぞや」みたいなHow to JICをやったの。その時言ったのが「国連のマーク使っているよね。JICは国連のマークを使える唯一の民間団体である」、次に言っていたのが「JICの中では皆が平等である、もちろん役職の上下はあるけども同じ志を持つ仲間である」、年齢は関係なく、身分も関係なく皆平等で活動するんだよ」という話をしたの

「なんか良い会だなあ」と思ってた。その時は懇親会までお邪魔して、大瀧さん（第53代理事長大瀧孝弘先輩）とか三浦さん（第54代理事長三浦博先輩）に初めて行ったのにもかかわらず色々話かけてきてくれて「すげえ積極的な人達がいる会だな」と。

2回目はまさかプラザでの定例会に参加してその時初めて3分間スピーチを見て、当時の原田専務（OB原田敏匡先輩）が3分びつたり喋って後で聞いたら同じ歳だと、こんなすげえ人がいるんだ、と思って「（JIC）入ります」と。

それだけじゃなくて入ったきっかけが、三国理事長が事務所に挨拶来て、その時言われたのが「こんなところに社労士事務所あるとは思わなかった」って言われたの。「なんて失礼なんだ」（笑）と思いつつ、やっぱり知られていないってことはその人の中に自分は存在していないんだよね。存在していないければ仕事には繋がらないし、この先も無いなと思ってる。それで、ちょうど2008年の理事長予定者が父親のお客さんの千葉さん（第49代理事長千葉博之先輩）だったのね。千葉さんも事務所に来て「来年、理事長やるので入ってくれないか」と理事長二人から言われて「こんな自分でよければ」と。

道川貞徳（以下、道川）

ちよつとお聞きしたいのですが、齋藤先輩のお話の中で思ったのが、入会までの過程で納得して自ら入ったパターンという認識でいいですか？

齋藤先輩 そうだね、納得して入ったね。ただ、ある程度こなす会ですよというやんわりした雰囲気が入ったけど、自分の中で「やるかやらないか」だけだったの、ぶつちやけ入ったあとダメだったら辞めれば良いやくらいの気持ちで入ったね。



道川 最初、定例会オブザーブしたときに知り合いもしくは友達みたいな方はおられましたか。

齋藤先輩 ゼロです。全く知り合いのいないところに飛び込んでいきました。阿部さんは仕事で1回会っただけ。唯一千葉さんは事務所に何回か来て挨拶するような関係ではあったけど、ゆつくり話をしたこともないし。

道川 私自身、入会したときにまず誰も（知り合いが）いない状況でした。で、周りを見たときに「みんな友達じゃん」とっていうイメージだったんですね。要はJIC入る前から友達だと。最初はなかなか輪に入れない状況で（会への）出席にも至らなかった。話を聞いて意外と皆さん入会を決意するときにいいのは知らない人が多いですね。

齋藤先輩 人を知らなければいけないと本当に思ったんですよ。手っ取り早いのが入ってしまったら何かしら覚えるだろうな、というのがあるって、まあそれは後で確信になるんですけど。

道川 自分が入ったとき、誰が入会歴が長くて、役職もわからない、誰と話をしているのかわからない、近い人は誰なんだろうと。だから動けなかった。ただ、落とし文句として「来れるときでいいよ」というのはある。でも、この言葉実は深くて、来れるように自分で時間を作っていくかなければいけないのかな、と後々知りましたね。

苦労したこと

齋藤先輩 学んだことはね、「人付き合い」と「組織とは何か」というのは学んだ。特にJCっていうのは相手の立場になって考える。失礼のないようにしなければいけないとか相手の立場になって1から事業を構築していく、そういうのはすごい勉強になった。「これやったらダメじゃないか」「あれやったら失礼じゃないか」とか理事会で言うんですよ。それは全く無い視点だったから、そういうことまで気を使ってやっているんだとか。あと組織。自分は1人でやっていったから、そのとき社員がいるわけでもなく部下を使うわけでもなく。委員長になってから人に頼らなければいけない、絶対に自分1人でやれないので、そうすると人の力の借り方を覚える。こういうふうに頼まないとこの人はやってくれない。その人の考え方とかタイプによつて言葉の通じる通じないがあるから、この人にはこういう頼み方、この人には具体的に、この人にはこれやってねって言えば大丈夫、そういう見極めをしながらですね。で、どうしても前提として「平等」というのはあるんだけども、（組織が）ピラミッド状なので理事長に対しての態度とか組織の一員として振る舞う。

どう振る舞うのが正しいのか、だから振る舞い方は総会の懇親会とかで並んで「ようこそ」って迎えするじゃない、それに最初違和感を持ってたの、そこまでする必要ないじゃないって。けどやっていくうちに、それが必要だなと来てくれた人に対してちゃんと「礼」をして、最後までおもてなしをして礼を尽くすというのが大事だと後から思った。

道川 齋藤先輩が今話されたことが私の所信に書いたことと一緒にびっくりしたんですけど、「相手の心に寄り添い行動しなければならぬ」理事会でも、職場でも通じることだと思いましたが、人の共感を得なければやりたいこともやれなくなってくる。媚を売るということではなくコミュニケーションを形成しなければ私たちは生きていけないじゃないですか。相手の気持ちや推し量る想像力を養わなければ生きていけない。でも子供の頃に教育として深いところまで教えてもらったことがなく、独学で学んでいかなければならない時代なんだと思う。数ある団体の中で「まちづくり」のできるひとつ「リーダーシップ」を發揮する「そういう団体でしか学んでいけないのかなど。

齋藤先輩 人の力を借りるとかお願いとかあるけど、それ以前に委員長として自分の例会に出てほしかつたら、やっぱり他の委員長のときは出なきゃいけないよね。「貸し借り」の部分って言ったらいいのかな、そこも大事だと思うし。やっぱり自分の例会のとくに来ないような人の為には行きたくないって思うよね。そこは人を大事にして、やってわかると思うけど本当に大変なんだよね。例会一つやるにしても。理事会こんな厳しいのかよ、みたいな（笑）

でも、これを経験すると、こんな苦労して毎月一回（理事会を経て定例会の）準備をして思うと「行かなきゃな」と思ます。その積み重ねで「お願いしちゃうんこつちも頼まれたらちゃんと返すし。」

道川 理事会もそうですけど意見のやり取りをするわけじゃないですか、やり取りをすることによってその人のことをわかっていく、お互いを理解し合えるようになっていく。

最初は「貸し借り」だと思っんですよ。でもそれが気付けば「相手の為に」に切り替わっていく。要はフロアメンバーが活性化するときっていうのは委員長の頑張りだと思うんですよ。私が思う青年会議所の主役って言うのはそれぞれが主役なんですけど、一つ事業をやるときは委員長が「花形」、理事会も委員長が「花形」、ここが楽しそうにしてればおそらくみんな楽しい。

齋藤先輩 委員長が一番楽しいかもしれない（笑）だから「楽しかったこと、苦労したこと」って同じ物の両面だと思う。考えると苦しいのが7割8割占めると思うけど、その代わり楽しいことで得るものは、その倍以上にある。だからやってると思う。

道川 「楽しい」と「楽」って違うじゃないですか。「楽」は苦労しない、今いる安住の地で成長は無いです。苦しみを圧縮して、事業をやるとき事業実施の時まで苦しいじゃないですか。やり終った時に一気に圧縮したのが楽しさに切り替わるじゃないですか。無報酬のなかで人の力を借りながら得る利益って「学び」なのかな。

齋藤先輩 苦労は必要だよ。自ら買う苦労じゃないからさ。

道川 苦労は買ってでもしろって言いますもんね。ある意味買ってますよね。会費払って（笑）

齋藤先輩 会費払って「何でこんなことやってるんだらう」って（笑）

道川 だから去年ある委員長が、適当な感じに見えるんだけど自分のやる事業をちゃんと一生懸命理解してたつていうのを見た時に彼に喋ったんですけれど、自問自答した分だけ必ず成長してる。だから君は必ず成長してる。ビジネスに對してもここでの経験って活かされてるだろうなと思う。だから人は見た目じゃないんだな（笑）

齋藤先輩 見た目じゃない（笑）皆すげえ考えてるんだよね。意外な人が意外なこと考えてるからさ、面白いんだよね。



JCで学んだことは「人付き合い」と「組織とは何か」
JCっていうのは相手の立場になって考える
⇒TERUFUMI SAITOU

川上 それでは次に理事長になられた経緯を、立候補、「私がやる」という感じだったのか、周りからの推薦だったのか、というところですね。

齋藤先輩 結論から言うと周りからの推薦で理事長にさせてもらいました。どうしてもその当時メンバーが少なかったので段々段々徐々に徐々にやる方向に固められていくんだよね。

入会3年目くらいから「齋藤君は将来の理事長候補だよ」とって冗談っぽく言われるの。「いやいやそんなことないですよ」とか言いながら気づいたら委員長やってる、副理になってる、専務になってる。「あれ」と。

委員長2年目で思った。そうするとやっぱり「流れ」ってあるじゃないですか。この歳でこのポジションやってるってことは、あと何年で卒業生何人で3年後4年後考えたら「まてよ（理事長）やらなきゃいけないぞ」と。

冗談でも言われると心の奥底に残るんだよね、その言葉が。そうすると、それに向けて考えてる自分がいるの。自分が理事長になつていく時はこういうメンバーが残ってるから、ここをこっぴどく残ってるから、ここをこっぴどく残ってるから、この人に對してもう少しアプローチをして、こういう事業をやつて（って考える）。理事長やる2年くらい前には次はこの人みたいなのが周りでも出来上がるでしょ、雰囲気。

それは期待されてるっていうのも嬉しいし、その好意に對して「NO」っていう自分も見せたくないし、だったら「やる」か「やらない」かの2択になってくる。その期待にに応えないと次の人に迷惑がかかる。だって準備ができていないから。経験もまだ浅いし。だったら踏ん張らなきゃいけないし、ただやるからには周年の時なので自分の頭の中で2年くらい構成を整えてやりました。

道川 齋藤先輩が理事長やられる時、予定者の段階から理事長をやる一年間のことを考えたと思います。じゃあ次の年にどうやって引き渡そうかというビジョンもあったのかな、と思うんですけど、そのところをお聞かせください。

齋藤先輩 予定者の段階では55周年だからJCの間、周年の理事長って新しい事業やってるんだよね。「みこし」とか「かるた」とか今も継続事業として残ってるもの。ってことは自分も何か新しいことやりたいっていうのもあるし、ブロックの徒歩事業は本当に良い事業だと思つたし、JCで初めて感動した事業かもしれない。これを下北の子供達に経験してもらいたいな、ってずっと思つてたから、予定者になる前の段階から

「（自分が）理事長やるんだってら徒歩事業やります」とずっと宣言してたの。「冗談抜きに子供達連れて3日間70キロ歩くから、佐井からむつままで」と。皆も自分が1回じゃなく何回も喋ってるから、そういう気持ちになってくる。予定者の段階で、8月かな？（まさかり）ロードを下見で歩いてるの。まだ始まってないのに。そのくらい準備して乗り込んだ事業だから思い入れあるし、また周年だから先輩方に敬意を表さなければいけないと思つていたから、どういう式典にしようかと、始まる半年前くらいからずっと喋つて、打ち合わせをして、いざスタートを切った時には最高のスタートを切れたと思つてる。半年やると終わりが見えてくるから、どういう形で引き渡そうかなと考えて、組織図を作った時に次の役員になる人を育てた。この中（2014年度組織図）で初委員長は恭太（副理事長佐藤恭太）、井本（副理事長本貴之）、大久保（直前理事長大久保泰康）、高屋（副理事長高屋龍一）。周年の中で4つの委員会が初委員長です。今思うと間違いじゃないな。この人達は今、むつJCの中核を担つてる。この時から出来る人達だったから安心して任せてた。

道川 前年の理事長から組織を受け継ぐっていう準備も含めて考えなければいけない。これが理事長予定者ですよ。1年間の運営のことでも予定者の時に考えなければいけない。次の人にどうやって渡すのかも予定者のときに考えなければいけない。



JCは「より良く」を追及していく団体なので。たぶん2歩進んで組織を渡すときに1歩下がるんですよ。1歩で済めば去年から見れば1段上にいる、これを繰り返していきければいいんですよ。齋藤先輩 そういう意味で言えば前年の三浦理事長が会員拡大成功して人を増やしたのね。それは本当に助かってる。じゃないとたぶん20人切るスタートだったかもしれないから。スタート時29人だったけど、前の年は25人くらいかな。一概に悪いとも言えないけど。少ないからこそ距離が縮まって上手く回るっていうのもあるけど、マンパワーっていうのも大事なの

周年事業について

川上 今年60周年を迎える年なんですけど、メンバーの中に55周年を経験している人が少ないというのもあって、今一度その時の状況とか想いついていうのを聞きたいと思います。

齋藤先輩 「まさかりロード」ですね。自分の中でこの1年のメインは「まさかりロード」という位置付けで、そこに最高のメンバーを投入させてもらいました。本当に準備も大変だし、言えないこともあったけど、(笑) それも全部ひっくるめて、色んなトラブルも乗り越えて(笑) 事業が成功に導かれたのかな、と思っっています。それは自分の力じゃなくて実行委員長とかの力なんです。理事長は何してたかという「方向性」だけ。こういうことが目的でこういうことやりたいから、あとはお願いします、と。五所川原JCでやってた(徒歩事業の)DVDを例会で観たりして自分の考えをある程度メンバーの心で共有してもらって、それがうまくいった秘訣かな。やっぱり自分の想いだけでは誰もついてきてくれなくて、そこに共有とか共感とかが無いと人って自主的に動いてくれないんですよね。共感してもらえるとそれが次に自分の目的になって動いてくれるので、そこまで持っていくのに半年、前年の夏から半年かけて、結果として最後自分が泣くような事業になった。

まさかりロードやってから先輩方がかけてくれる言葉とか態度が変わった気がする。でもそれは自分の力じゃないし、本当に感謝しています。たぶん理事長(経験者)は皆メンバーに感謝してる。よくよく考えたら、お金払ってこんな辛い経験をして、自分に対価があるのは成長だけだし目に見える物は何にも無いけど、一生懸命やってくれて、それもこの会の為に、組織の為に、理事長の為に、言ってくれる人もいるし、それは「感謝」っていう言葉でしか伝えられないので2014年度の人には感謝してます。(笑) やっぱ式典も色々あった(笑) やっぱ言えねえ(笑)

OBの先輩方を壇上に呼んで「先輩方のお陰で55年続けてこられました」っていうのを前面に出した式典にしてみました。良かったですね。それで喜んでたので良かったかな、と。でも式典があると歴史を振り返る良い機会だと思えますよ。(現役メンバーは)入会して3年くらい、平均3年くらいかな。そう考えると周年に当たらない限り過去何やってたか遡るタイムラグってまず無いと思うんですよ。なんとなく自分達で感覚で事業の構築とか、JCってこんな感じだよってやってるかもしれないけど、実は昔から引き継がれているものもあるし、もちろん変えていかなきゃいけないこともあるんだけども、そこを一回立ち止まってみるのも大事だと思います。

現在のむつJC

未来のむつJCについて

続きまして、現在のむつJCについて言いたいことや、思うことなどありましたらお願いします。

齋藤先輩 今年60周年を迎えて、まずこないだの周年事業「職業体験」。周りから「すごい良かったよ」と聞いて、OBとしては嬉しいな、と思う反面、なんか悔しいな、と。

自分自身(現役時代に)もつとできたんじゃないかって思ったの(笑)、去年も活発だな、と思っただけど、やっぱり新しい事業を立て続けにやってみて、そこに至る苦労を考えるとメンバーすごい頑張ってると思う。

青年会議所は今の求められるものを今の形で提供する、そういう会であってほしいと思うので、新しいものを外に向けて発信してほしいし、JC発の新しい価値観とか皆外からいっぱい学んでくると思うので、JCの中だけじゃなくて地域の人達にも発信してほしい。そういうことができるのってJCだけだと思いますから。

川上 これから先こういうむつJCであってほしいなどありましたらお願いします。

齋藤先輩 やっぱ本音で色んな意見を出してぶつかってほしいと思います。喧々諤々やるのではなく、その中にはその人に対する尊敬もありつつ、しっかりと言うべきことは言う、その中で人は磨かれるし、青年会議所自体は「学び」しかないので、

それを自分の中で本当に思ってくれれば、その人は地域にとって必要な人になると思う。結局JCは勉強の場なんです。JC終わって、さあここから何をするか、そのことを再認識してもらって卒業した時にむつ市に必要な人材になって頑張ってもらいたい。私は負けたくないと思ってる。現役メンバーに負けられないと思ってる。色々やるから(笑) ずっとライバルだから(笑) 負けずにブログ書いたはずなんだよ(笑)

道川 知ってますよ(笑) だって、「理事長様々」誰が一番書いたか全部チェックしてその人より多くしようと思いましたが(笑) (笑) すごい(齋藤先輩は)書いてた。発信って大事なんです。

齋藤先輩 最初に言っただけど、その人が知らないのと、それは「無い」んだよ。存在しないものなので、とにかく発信して知ってもらう、そこからですね。

道川 そのためには、JCとして正しいのか正しくないのか考えられるように、組織としてメンバーは物差しを持たなきゃいけない。

齋藤先輩が理事長の時に、「JCのメンバーであるっていうのが対外紙に載るじゃない。そうだった時に(JCバッジを指差し)これを付けていようが付けていまいがJCとして見られるよ。だから普段の立ち振る舞いを意識しなければならぬ」って。会社の看板を背負いながら青年会議所の看板も背負ってるんですよ。品格ある青年の集まりって入会資格に書いてるので(笑)

齋藤先輩 卒業した以上はずっとJCなのでしつかりやらないと。「さすがJCやってた人は違うな」って言われるくらいの認識でいてほしい。

道川 メンバー一同に伝えていきたいと思えます。本日はお忙しい中、お話していただきありがとうございます。